

John Donne の *Goodfriday, 1613.* *Riding Westward* について

—doubt wisely—

柴 鉄 也

1

官界、いずれは政界での成功を目指した John Donne が、紆余曲折の末、宗教界で出世を果たしたのは皮肉であった。James I 世のお気に入りの説教師として、後にはセント・ポール大聖堂の主席司祭として膨大なバロック的説教を残すこととなった Donne は青年時代から詩を書き続けた。Donne にとって詩は、才知を示す手段であり、思考、感情、世界観を表現する道具であり、時には生活費を稼ぎ出す芸でもあったが、1615年1月、セント・ポールの説教師に任じられ、俗世間との関係が稀薄になってからは詩を書くことも少なくなった。もはや才知をひけらかす必要もなくなり、パトロンに気に入られる必要もなく、力を説教に注ぐようになる。年齢も40歳を越えていた。

John T. Shawcross 編纂の全詩集では、Donne は長短合わせて194編の詩を書いている⁽¹⁾。内容は、恋愛詩、風刺詩、書簡詩、祝婚歌、挽歌など多岐に渡り、宗教詩は35編ある。後に英国国教会の司祭となるにしては意外と少ない。以下、*Goodfriday, 1613. Riding Westward* を中心に Donne の宗教詩の特徴を考えてみたい。焦点をあわせるのは、詩の主題や成立の背景、伝記との照らし合わせではなく、詩の内容と表現との関係、Donne の詩の表現法、技法、詩法である。

2

16世紀後半から17世紀前半にかけてヨーロッパでは多様な宗教詩が書かれている。大陸では宗教改革と反宗教改革の対立が激化し、イギリスでも国教会とプロテスタント、禁止されたカソリックの各宗派が三つ巴になって相争っている時代だった。宗教とイデオロギーをめぐる社会的混乱のなか、宗教詩は熱を帯びてくる。

先ず Donne の詩と、当時 Donne より優れた宗教詩人と見なされていた George Herbert の

詩を比べてみる。Herbert も Donne と同じように、様々な事情の末、世俗世界での出世をあきらめ、地方の教会の説教師となった。世俗的な詩を書くこともなく、もっぱら宗教詩を書いて早世した。

Herbert は、「死」について *The Temple* (1633) のなかで次のように書く。

Death, thou wast once an uncouth hideous thing,
 Nothing but bones,
 The sad effect of sadder grones;
 Thy mouth was open, but thou couldst not sing.

For we consider'd thee as at some six
 Or ten yeares hence,
 After the losse of life and sense,
 Flesh being turn't to dust, and bones to sticks.

We lookt on this side of thee, shooting short;
 Where we did finde
 The shells of fledge souls left behinde,
 Dry dust, which sheds no tears, but may extort.

But since our Saviours death did put some bloud
 Into thy face;
 Thou art grown fair and full of grace,
 Much in request, must sought for as a good.

For we do now behold thee gay and glad,
 As at dooms-day;
 When souls shall wear their new aray,
 And all thy bones with beautie shall be clad.

Therefore we can go die as sleep, and trust
 Half that we have

Unto an honest faithfull grave;
 Making our pillows either down, or dust.

Andrew Marvell の *To his Coy Mistress* と同様の三段論法のもと、「かつて私たちは死を恐ろしいものと思っていた。しかし、救世主が自らの命をもって、お前を征服した。したがって、私たちはお前を恐れることはなく、お前は眠りのようなものだ」と述べる。Herbert の詩は、詩の進行に沿った論理性を持ち、形式も整い、「死」「血」「骨」といった重い言葉を使いつつも、表現は穏やかで、自らの信仰に自信を持っているように見える。

Donne も「死」に呼びかける。

Death, be not proud, though some have called thee
 Mighty and dreadful, for, thou art not soe,
 For, those, whom thou think'st, thou dost overthrow,
 Die not, poor death, nor yet canst thou kill mee;
 From rest and sleepe, which but thy pictures bee,
 Much pleasure, then from thee, much more must flow,
 And soonest our best men with thee do goe,
 Rest of their bones, and soules deliverie.
 Thou art slave to Fate, chance, kings, and desperate men,
 And dost with poyson, warre, and sicknesse dwell,
 And poppie, or charmes can make us sleepe as well,
 And better then thy stroake; why swell'st thou then?
 One short sleepe past, wee wake eternally,
 And death shall be no more; Death, thou shalt die.

(*Holy Sonnets 6*)⁽²⁾

死を擬人化し、「お前は人生の終わりではないのだ、私は主によって救われるのだから」と、キリスト教の教義に沿った考えを述べる。主題的には Herbert と同じである。しかし、トーンは異なる。Herbert の抑制のきいた、穏やかで自らの信仰を確信しきったような表現に対し Donne の表現は強く、強すぎるほどだ。単音節語を多用し、ドラマのクライマックスのように性急に言葉を畳みかけ、挑戦的に対象に迫る動きの激しいソネットである。Herbert も

短い音節を多用しているのだが、口調は柔らかで、諭すように死に語りかける。Donneは頭ごなしに死を恫喝する。

二人の詩を分けるものは、信仰に対する姿勢にあるのかもしれない。Herbertのもつ隠遁者の信仰告白のような静謐さとDonneの動的で誇示的な表現は対照的である。自らの信仰の深さを背景に、これといった派手さもなく、淡々と、しかし、着実に表現を積み重ねて最終行に行くHerbertに対し、Donneは畳みかけるように一気に最終行に向かう。結句の逆説的表現“Death, thou shalt die”は印象的だが、Donneの性急で断言的な表現の裏にはHerbertの信仰とはまた別の信仰の仕方、もしくは信仰に対する姿勢が潜んでいるのではないか。宗教詩としては不安定な姿勢であるのだが。

Holy Sonnets 19編がすべて“Death, be not proud”のような強い詩ではない。例えば10番では以下のように、語られる。

Batter my heart, three person'd God; for, you
 As yet but knocke, breathe, shine, and seeke to mend ;
 That I may rise, and stand, o'erthrow mee,' and bend
 Your force, to break, blowe, burn, and make me new.
 I, like an usurp'd town, to another due,
 Labour to admit you, but O, to no end.
 Reason, your viceroy in me, me should defend,
 But is captived, and proves weak or untrue.
 Yet dearly I love you, and would be loved fain,
 But am betroth'd unto your enemy ;
 Divorce me, untie, or break that knot again,
 Take me to you, imprison me, for I,
 Except you enthrall me, never shall be free,
 Nor ever chaste, except you ravish me.

(*Holy Sonnets* 10)

ここには「信仰を疎かにし神に従わなかった私を罰してほしい」と懇願する詩人がいる。“Death, be not proud”と言い放つ詩人とは異なり、この詩では、詩人は自分の信仰に自信が持てない。詩の内容は異なるが、表現は同様に強く、動きはダイナミックである。戦い、牢獄、捕虜、さらには凌辱といった激しい言葉で神に懇願する。「心ならずも神に背いた私」の

詳細は語られないが、背信と懇願、理性と信仰という対立項からは「信じるために疑う」、「つかまえてほしいから逃げる」という逆説的な姿勢が浮かび上がる。「疑った後に信じる」または「信じたいから疑う」というのは宗教詩においても不健全な思考とは思えない。

3

Helen Gardner は Donne の宗教詩を表現の仕方から三つに分けている。*Holy Sonnets* の誇示的表現スタイル、*La Corona*、*A Litany* の宗教詩の定形に従った Donne には形式的なスタイル、そして *Goodfriday*、*The Crosse*、*A Hymn to Christ at the Authors last going into Germany*、*A Hymn to God my God in my sickness*、*A Hymn to God the Father* など Donne の置かれた時々状況の中で書かれた“Occasional Poems”である。*Holy Sonnets* には良かれ悪しかれ Donne の詩の過剰演出があり、*La Corona* と *A Litany* には Donne の自発性が欠けているが、*Goodfriday* などに Donne という人間の心情が窺えるのではないかと Gardner は言う⁽³⁾。Gardner は妻の死やドイツ旅行など Donne の伝記的出来事と重ねてこの第三のグループの詩を読むが、ここでは伝記的解釈には触れない。

第一のグループの短い言葉の畳みかけ、耳障りな韻律の多用、ドラマチックな表現、演劇性は Donne の詩の特徴であり、*Songs and Sonets* 以来、読者に馴染みの表現手法である。綺想と呼ばれる特異な比喩、イメージ、ごつごつした韻律で一気に読者を引きつける。または、読者を遠ざける。

Marke but this flea, and mark in this
How little that which thou deny'st me is ;
Mee it suck'd first, and now sucks thee,
And in this flea, our two bloods mingled bee;

(*The Flea* ll.1-4)

For Godsake hold your tongue, and let me love,
Or chide my palsie or my gout,
My five gray haire, or ruin'd fortune flout,
With wealth your state, your minde with Arts improve

(*The Canonization* ll.1-4)

芝居の台詞のように Donne は恋愛詩を書き出し、同じように宗教詩も書き出す。女性を口説

こうとする時も、死を相手に豪語する時も、神に呼びかける時も、懺悔する時も変わりはない。

At the round earths imagin'd corners, blow
Your trumpets, Angells, and arise, arise
From death, you numberlesse infinities
Of soules, and to your scattered bodies goe,

(*Holy Sonnets 4 ll.1-4*)

This is my play's last scene ; here heavens appoint
My pilgrimage's last mile ; and my race
Idly, yet quickly run, hath this last pace ;
My span's last inch, my minute's latest point ;

(*Holy Sonnets 3 ll.1-4*)

しかし、よく言われることだが、Donneの恋愛詩には恋人の描写がほとんどない。詩人は「女」に言い寄りながらも、関心は「男」の心情にある。女性に対する男の気持ち、望み、それが受け入れられるか、拒絶されるか。受け入れられる時、詩人は歓喜や恋人との幸福を歌うが、拒絶される時は、失望、自分を受け入れない相手に対する侮蔑、不信を語る。相手の様子や反応は、男の言葉から想像するしかない。これと同じことがDonneの宗教詩にも当てはまると、Murray Rostonは言う⁽⁴⁾。

Donneの宗教詩には、バロック美術や文学における目のくらむような神への賛美、賛嘆、献身もなければ、現実世界の悲惨、死体の描写、地獄についての詳細な表現もない⁽⁵⁾。あるのは、信仰を求める強い思い、それを得たと思う自信、または、それと反対に自分の信仰の深さに対する自信のなさ、さらには懐疑である。恋人に対する強い思いと恋人に受け入れられない時の不安や不信と同じように、神への愛が受け入れられる期待と拒絶される不安である。Donneの関心は恋愛であれ信仰であれ、対象に対峙した時、自分の内部に起こる想念、反応にあり、それを手掛かりに思考を深めていく。

それでも、*Holy Sonnets*はDonneの詩の技術の見せ場、才知の誇示という色彩を強く残しているが、*Goodfriday, 1613. Riding Westward*では詩の様子が変わってくる。Gardnerのグループ分けで言えば、第三の“Occasional Poems”である。Donneの私生活での出来事に触発されて書かれた詩群で、その時々状況に応じて「私詩」という顔を持つ。そこでは身近な人

間の死や別離といった試練、逆境に置かれた時の詩人の信仰に対する思い、不安、絶望、諦念、克服とその効果的表現が問題となってくる。言語遊戯、知のゲームとしての詩を書きつつ、詩人は自分の信仰の深さを測ろうとする。神は「絶対」であり、それに対して今の自分は如何なるものであるか。

4

Goodfriday, イースターの前の聖金曜日はキリスト受難の日であり、キリスト教徒にとっては復活へと繋がる記念すべき日であると同時にキリストを死に追いやった悔悟の日でもある。Donneは1613年の聖金曜日に所用があって西へ旅する⁽⁶⁾。キリストの処刑が行われたのは東のエルサレムで、詩人は東に背を向けて旅をする。この「東に背を向けて西に向かう」ことが *Goodfriday, 1613. Riding Westward* のモチーフとなる。

Let mans Soule be a Spheare, and then, in this,
 The intelligence that moves, devotion is,
 And as the other Spheares, by being growne
 Subject to forraigne motions, lose their owne,
 And being by others hurried every day,
 Scarce in a yeare their naturall forme obey :
 Pleasure or businesse, so, our Soules admit
 For their first mover, and are whirld by it.
 Hence is't, that I am carryed towards the West
 This day, when my Soules forme bends toward the East.

(ll.1-10)

天球の比喻は例を挙げるまでもなく Donne の詩では多く使われ、それ自体、目新しさはない。ここでもプトレマイオスの天動説を持ち出して、「もし人の魂が天球とするなら、天球を動かす天使が信仰ということになる」と、天球と天使の関係を魂と信仰の関係に置き換える。「しかし、天球が様々な外力により、その運行を乱すように、魂も仕事や快樂により、本来の正しい軌道から離れることもある」という寓意を引き出す。この前置きを受けて詩が始まる。そして ll.9-10の“carryed”に、この詩の前半の意味が凝縮される。

Hence is't, that I am carryed towards the West

This day, when my Soules forme bends toward the East.

「わたし」は天球の動きを乱すものによってやむを得ず西へ「連れて行かれる」。これは「わたし」の意志ではないのだが、「わたし」は「運ばれ」ることとなる。“carried”は意志に反して連れて行かれるのであって、さらに“I”すなわち「わたし」は宗教関係者でもないようだ。Donneの、この前後の伝記的知識を「わたし」に重ねても意味はない。ただ市井の人であるらしい「わたし」は、この日、聖金曜日にたまたま西へ行く。しかし、「わたし」はそれが気になって仕様がなない。

There I should see a Sunne, by rising set,
 And by that setting endlesse day beget;
 But that Christ on this Crosse, did rise and fall,
 Sinne had eternally benighted all.

(ll.11-14)

ここで使われる“rise”, “set”, “fall”には重層的な意味が込められる。“rise”には、キリストの誕生、十字架に上ること、さらには復活、そして日の出といった意味が込められる。“set”も同様に、キリストの死、十字架降架、人間の運命の下降、日没といった意味が込められる。“fall”はさらに墮落という意味も包含する。キリストは「十字架に上り、そこに上ることによって死に、十字架から降ろされて復活することで、人類の沈みかかった運命を救う」という複雑な意味を織りなす。この言葉の遊戯に関して詩人が真面目なのか、遊んでいるのかと問うことにどれほどの意味があろうか。読者はただ言葉の意味の変化を追うだけでいいのではないか。詩人は西に向かって進む馬の背にいる。その姿から、次々と連想が続く。それを知識が支える。

Yet dare I almost be glad, I do not see
 That spectacle of too much weight for mee.
 Who sees Gods face, that is selfe life, must dye;
 What a death were it then to see God dye?
 It made his owne Lieutenant Nature shrinke,
 It made his footstoole crack, and the Sunne winke.
 Could I behold those hands which span the Poles,

And tune all spheares at once, peirc'd with those holes?
 Could I behold that endlesse height which is
 Zenith to us, and to'our Antipodes,
 Humbled below us? or that blood which is
 The seat of all our Soules, if not of his,
 Make durt of dust, or that flesh which was worne
 By God, for his apparell, rag'd, and torne?
 If on these things I durst not looke, durst I
 Upon his miserable mother cast mine eye,
 Who was Gods partner here, and furnish'd thus
 Halfe of that Sacrifice, which ransom'd us?

(ll.15-32)

かつて Louis L. Martz はこの時代の宗教詩の主流を瞑想詩と規定し、様々なヴァリエーションを挙げ、分類した⁽⁷⁾。Helen Gardner も追随し、Donne の宗教詩の特徴を主として瞑想という範囲の中で考察している。その流れで言えば、*Goodfriday, 1613. Riding Westward* は詩人の置かれた状況に自らの問題を重ね、類似点を発見し、そこから宗教詩を成立させる瞑想詩の典型となる。簡単に言えば、聖金曜日にエルサレムに背を向けて西に向かうという状況から詩が思いつかれた。上に引用した部分も、瞑想詩によくある自己との対話という形式に入る。Martz の言葉を借りれば “composition by similitude” から始まり “colloquy” 「問いかけと答え」で詩が展開される。しかし、この詩は普通の瞑想詩とは、ずれを見せる。

頓呼法の連続の中で詩人が描くものは、現実的なキリストの処刑の情景ではない。「出エジプト記」(l.17)、「マタイ伝」(l.19) など聖書からの引用と並んで、“Lieutenant Nature” “the Poles” “Zenith” “Antipodes” と詩の冒頭の天球に呼応するように、「自然は震え、大地は裂け、太陽は目を閉じ」という磔刑の際に起こる天変地異を詩人は並べ立てる。詩人はかつて起こった悲劇そのものには背を向け、キリストの肉体の死にはほとんど関心を持たない。

John Carey は Donne の伝記的出来事から *Goodfriday* の地形的考証をした後、Donne の旅の行程にある一切のものが、川も木も森も鳥も詩の中に描かれていないこと、つまり出発地と目的地にあるものに詩人は全く目を向けていないと指摘する。詩人が乗っているはずの馬でさえ、表題に “riding” とある程度で詩の中で描写されることはない。目を向けるのは自分とキリストだけであり、この詩のトポグラフィーは超現実であると論じている⁽⁸⁾。

現実の地形からアレゴリカルな地形への変身から読み取れるのは、詩人が瞑想の過程で公

式的なキリストの悲劇と人類の罪に思いを至らせているのではなく、むしろ「キリストに背を向けて西に向かう」ことで起こる自分の信仰心の問題ではないのか。たとえ西に向かっているとしても振り向こうと思えば振り向けるのに、あえて背を向けたままでいることで自己の信仰を試す。「天球の乱れのように人の魂も快楽や所用でこの大事な日に主に背を向けなければならない」自己の背信行為との対決である。

しかし、詩人は決して振り向かない。この頑なまでの姿勢のなかで、心は東に向かっているとと言う。振り向かないからこそ思いは募る。

Though these things, as I ride, be from mine eye,
 They're present yet unto my memory,
 For that looks towards them; and thou look'st towards mee,
 O Saviour, as thou hang'st upon the tree;
 I turne my backe to thee, but to receive
 Corrections, till thy mercies bid thee leave.
 O thinke mee worth thine anger, punish mee,
 Burne off my rusts, and my deformity,
 Restore thine Image, so much, by thy grace,
 That thou may'st know mee, and I'll turne my face.

(ll.33-42)

11行目の“*There I should see a Sunne, by rising set*”から詩人は「そこ」すなわち東に目を向けませんが、心の目では見ている。主は目を背けている「わたし」を見ている。この逆説的表現が詩の後半のクライマックスとなる。神に背き、背き続けることで、「それだけ強くわたしを叱り、罰してほしい、それまでわたしは振り向かない」と詩は終わる。「わたし」の信仰は苛烈なもので、静謐、安穩の対極にある。この姿勢は“*holy discontent*”とも言うべきもので、信仰とは苦悩を重ねるものだという姿勢が見える。かつて知を求めた Donne は若い頃に以下の詩行を書いている。この姿勢は信仰を追求するときも同じである。

...doubt wisely; in strange way
 To stand inquiring right, is not to stray;
 To sleepe, or runne wrong, is On a huge hill,
 Cragged, and steep, Truth stands, and hee that will

Reach her, about must, and about must goe;⁽⁹⁾

5

Donne の宗教詩の研究は *Holy Sonnets* を中心としている。確かに、*Holy Sonnets* 19編には Donne の特徴的な詩が並ぶが、宗教詩の中で *Goodfriday, 1613. Riding Westward* のような詩が占める位置も興味深い。宗教詩を読んで、詩人の宗教観を論じることも可能だろう。しかし、宗教詩をそのまま詩人の真意と取るのはナイーブすぎる。詩は表現の技術であり、その主題に即した展開、構成、力点の置き方、表現の仕方に詩の力がある。ここまで Donne の宗教詩を検討したが、それが詩人の宗教観とは思っていない。Donne の宗教詩に改めて Donne の表現力、その重層性、巧みな詩法を確認したに過ぎない。結論として言うならば Donne の多様で、また、統一性のない宗教詩、恫喝と懇願といった姿勢の落差、「許しを得るために背く」といった逆説的思考法は“doubt wisely”のそれぞれの到達点であるということだ。1615年以降、Donne は数編の詩を書いたのみである。もはや詩における“doubt wisely”の必要もなくなったのかもしれない。

注

Donne の詩のテキストは Helen Gardner 編纂の *John Donne The Divine Poems* (Oxford 1952) による。他の詩人たちのテキストは *The Metaphysical Poets* ed. by Helen Gardner (London 1957) より引用。また、A. J. Smith, *John Donne: The Complete English Poems* (London 1971) と John T. Shawcross, *The Complete Poetry of John Donne*, (New York 1967) を併せて参照した。Satire は W. Milgate (ed.), *John Donne: The Satires, Epigrams and Verse Letters*, (Oxford Clarendon Press, 1967) を使用した。

(1) John T. Shawcross (ed.), *The Complete Poetry of John Donne*, (New York 1967)

(2) Donne の宗教詩の半分以上を占める19編の *Holy Sonnets* の順番には諸説がある。Donne の死から2年後の1633年にまとめられた12編、1635年に追加された4編、19世紀末に発見され1899年に付け加えられた3編だが、Helen Gardner はテキストクリティークの結果、伝統的な順番を入れ替えている。その後出版された John T. Shawcross 版 (1967) は Gardner の順番に沿っている。しかし、A. J. Smith 版 (1971) は1635年版とその後の補遺の順番に戻っている。それぞれ主張はあるのだが、ここでは使用したテキストである Helen Gardner の順番に従った。

(3) Helen Gardner *John Donne The Divine Poems* (Oxford 1952) p.xxxiv

(4) Murray Roston *The Soul of Wit; A Study of John Donne* (Oxford 1974) p.204

It has often been remarked that we know almost nothing of the mistresses to whom Donne addressed his love poems — whether they were dark or fair, tall or short — for his attention was focused on the experience of the male lover himself, his hopes, musings, disappointment, and joys. And the same holds true for the religious writings.

(5) 例えば J. M. Cohen *The Baroque Lyric* (London 1963) ch.2 Desert and charnel-house には死のイメージに取り憑かれた、まるで死体愛好者のような詩人たちがいる。J. P. Hill, E. Caracciolo-Trejo *Baroque Poetry* (London 1975) ch.4 On Life, Time And Death では無常観、不安定な生、死との対決、神による救済の詩が並ぶ。Harold B. Segel *The Baroque Poem: A Comparative Survey* (Dutton, 1974) pp.251-9にも様々な死が描か

れる。

(6) 詳細は例えば A. J. Smith, *John Donne: The Complete English Poems* (London 1971) pp.652-3の解題を参照。
ただし、詩の成立に関するもので、詩の解釈には関係ない。

(7) Louis L. Martz *The Poetry of Meditation* (New Haven 1954) pp.54-6

(8) John Carey, *John Donne: Life, Mind and Art* (Oxford 1981) pp.119-21

The poem's geography is surreal. He moves like a planet away from a giant crucifix, the landscape's only feature, which he dare not look at, and on which Christ hangs, watching him. In all the two counties, Donne and Christ are the sole figures.

(9) Satire 3 ll.78-82